調　査　研　究

日本におけるメガロポリスの人口学的研究序説

舘　　稔

目　　次

はじめに
1．語　　義
2．定　　義
3．課　　題
4．この研究の方向
おわりに

はじめに

"メガロポリス，megalopolis" の研究が学界の注目をひくようになったのは，おそらく，1957年，Jean Gottmann の論文[1] が発表されてからのことであろう。1961年には，J. Gottmann の単行書[2] が公刊され，ますます学界の関心を高めたとみられる。

日本では，1963年，愛媛大学の石水照雄氏が J. Gottmann の megalopolis の研究を明確に紹介された[3]。1964年，丹下健三教授が，日本列島の将来像を描くに当たって "東海道メガロポリスの形成" を支持されたことによって[4]，関係方面の関心が急に高まってきたとみられる[5]。

1) Jean Gottmann, "Megalopolis, on the Urbanization of the Northeast Seaboard", Economic Geography, XXXIII, July, 1957, pp. 189～200. [Reprinted in Harold M. Mayer and Clyde F. Kohn (ed.), Readings in Urban Geography, The University of Chicago Press, 1959, pp. 46～56.].

2) J. Gottmann, Megalopolis, The Urbanized Northeastern Seaboard of the United States, The Twentieth Century Fund, New York, 1961, xii+810 ps.

3) 石水照雄，"MEGALOPOLIS の概念と諸問題—Jean Gottmann の Megalopolis 研究について—"，日本地理学会都市化研究委員会，1963年7月5日，科学技術庁資源局都市問題特別委員会，1963年7月19日，配布資料.

4) 丹下健三，"日本列島の将来像—東海道メガロポリスの形成—"，財団法人日本地域開発センター，地域開発，1964年11月，pp. 2～9.（この論文は1964年8月17日開催の日本地域開発センター・セミナー講演を基本にして，多少の修正を加えられたものである）.
丹下健三，"日本列島の将来像"，中央公論，1965年1月，pp. 48～71.
丹下健三，"あすの都市の姿"，朝日新聞，1965年1月1日，p. 22.

5) 例えば，
"日本の都市の現状を憂う"，奥井復太郎，丹下健三，中司　清，原口忠次郎，蠟山政道，座談会，朝日新聞，1964年10月27日朝刊.

都市の形態をあらわす学術語としての“メガロポリス”は比較的新しい概念であり，その研究はむしろ今後にまつものといってよい。また，その研究は，これまでの都市研究一般についてみられるとおり，人口学，地理学，経済学，社会学など広範な個別科学の領域にわたる総合的研究を必要とすることはいうまでもないが，メガロポリスが，形式的には，結局は，人口集積，agglomeration，の最近の特別な発展形態の1つであるとみられるし，人口学自体が“総合科学，multidisciprinary science”，であるところから，人口学の見地からの接近がきわめて有用であると考えられる。

そこで，数年前から，人口問題研究所においては，この問題に関心をもつ数名のスタッフが，人口学の見地から，文字どおり，こつこつと人口材料による分析を試みてきた。たまたま，上記のごとく，日本においても，メガロポリス研究がようやく注目をひくようになってきたことにかんがみ，この際，分析の結果を研究所内の机上に積み重ねておくよりも印刷して関係方面の利用に供しようと考え，はなはだ未完成の素材には過ぎないが，思い切って，本誌上に研究分担者がそれぞれ執筆することとした[6]。

“メガロポリス”の研究は比較的新しい研究であるから，一応，“メガロポリス”の概念や課題について若干の私見をしるして序説とすることとする。

1. 語　　義

“メガロポリス”によっておそらく，まず，連想されるのは，現在のギリシャの小さな町の名前としての，すなわち，固有名詞としてのメガロポリス，Megalopolis，であろう。この町は，ペロポネサス半島の大略中央，トリポリスの西南約24 kmにあり〔→図〕，タバコ，小麦，ブドー酒，バレイショ，その他農産物の地方的集散地であって，人口わずかに 2,882（1951年）といわれている[7]。

この現在の小さな町の名前が，なぜ，“超大都市地域”[8]とか“巨帯都市”[9]とかを意味する用語となったのであろうか。それは，結局，ヨーロッパ文化の父となり母となったギリシャ文化の歴史のうちにあるとみられる。この名称を取り上げた最初の人は J. Gottmann であるが，彼は数名の古典学者の意見を徴し，注意深くこの用語を選択したといっている[10]。

紀元前370年，テーベ，Thebae，のエパミノンダス，Epaminondas，が南部アルカディアのスパルタに対する前哨（ぜんしょう）基地とすることとアルカディア連盟の首都としようとして，現在のメガロポリスの町の北方にメガロポリスという一大“ポリス，polis”を建造した[11]。古代都市，メガロポリスは記録によ

6）1964年11月13日，財団法人日本地域開発センターにおいて，若干の私見を述べた．
館　稔，“日本のメガロポリスの形成と人口増加”，地域開発，1964年12月，pp. 1～3.
1964年12月15日，人口問題研究所における研究経過の概要を人口問題研究所評議員会おいて報告した．
人口問題研究所，“メガロポリスに関する研究”，人口問題研究所評議員会提出資料(謄写)，1964年12月15日．

7）“Megalopolis”, Encyclopedia Americana, International Edition, New York, 1964, Vol. 18, p. 595.

8）石水照雄，上掲ペイパー，p. 2.

9）磯村英一，変わる地方都市，“都市化日本”の顔，日本経済新聞社新書，10，1964，p. 92.
磯村教授の訳語は，形態を表現して妙であるが，わたくしは，多少これに，最も強調さるべき実体的特徴を投入すれば，“巨帯連関都市”あるいは“巨帯総合都市”といってもよいと思う．
また，丹下健三教授は“巨大都市連合”という語を使われているが，これも1案である．しかし，形態的特徴の表現に乏しいうらみがある．—丹下健三，上掲論文，地域開発，1964年11月，p. 7.

10）J. Gottmann, op. cit., Art., reprint, p. 46 n. および J. Gottmann, op. cit., 1961, p. 4.

11）古代ギリシャ語の“polis”は，独自の意味をもつものであって，H. D. F. Kitto によれば，“都市国家，city-state”という訳は悪い翻訳であって，“polis”は“city”でもなければ，ましてや“state”でもないということである．

（次ページへつづく）

メガロポリス町の位置を示す略図

全国教育図書株式会社，標準世界地図，
改訂第5版，1961年による．

って伝えられてきたが，1890～92年，その遺蹟がアテネのイギリス大学，The British School，によって発掘され，記録と事実とがよく検証された。

40の町がメガロポリスに参加し，テーベの各地域から市民の移住が行なわれ，周囲50スタディア(約10km)で，強固な城壁をもって囲まれていた。アルカディア，または，ペロポネサス半島最大の都市であったといわれ，現在のメガロポリスより北方へ約39kmにわたって伸びた帯状の都市であった。東西にヘリッソン川，Helisson，が貫流して，メガロポリスをほぼ相等しい2つの部分に分かっていた。北部は整然として区画された市街地であり，ヘリッソン川の南岸にアルカディア連盟の政庁はじめその他の官庁が建てられていた。

発掘の結果によると建造物の年代には相異があるが，一定の計画にしたがって建造されたことは明らかであると認められている。その後，このメガロポリスはギリシャの内戦によって，しばしば戦災をこうむり，また帰属も転々としたが，紀元前146年から始まったローマの支配下に，ついにその存在の意義を失ない，廃墟(はいきょ)に化していった[12]。

古代メガロポリスの特徴を要約すればおおむね以下のごとくである。

（1） 特定目的―軍事と連合都市首都―をもって計画的に建造された都市であるということ。

（2） したがって，ゆう大な都市計画に基づき，その計画は重要な特色のある古代都市計画の1例であること。

（3） 都市建造に当たって都市住民の外部からの移住が行なわれたということ。

（4） 連合都市であるということ。

（5） 当時としては巨大都市であったということ。

（6） 形状は帯状都市であったということ。

など。

とにかく，今日の大都市発展の新しい形態や機能は，もはや，巨大都市とか，“メトロポリス，metropolis”では表現できなくなって，J. Gottmann が 2,400年あまり前，遠い古代ギリシャ人が，

H. D. F. Kitto, The Greeks. A study of the character and history of an ancient civilization, and of the people who created it, Pelican Books, A 220, Melbourne, London and Baltimore 3rd print, 1954, pp. 64～79.

人口集積という形態からいって，それは都市に近いとみられるから，以下，仮りに“古代都市”と略称する．

なお，Kitto, op. cit., p. 154. 参照.

12) “Megalopolis”, Encyclopaedia Britannica. A new survey of universal knowledge, Chicago, London, and Toronto, 1957, Vol. 15, p. 213.

“Megalopolis”, Encyclopedia Americana, ibid.

その建造したポリスに托した夢にちなんでメガロポリスの語を選んだことは，確かによい用語法であるといってよい。こうして，J. Gottmann とともに，あえて，古代ギリシャ人の夢が，われわれの時代に実現してきたということができるであろう[13]。

上記のごとく，今日の科学用語としての“メガロポリス”については，“超大都市地域”，“巨帯都市”などの訳語があって，それぞれ意義と価値とをもっているが，以下，この稿では，特定の訳語を用いることなく，“メガロポリス”を用いることとする。

2. 定　　義

メガロポリスの名称を与え，その概念をはじめて科学的に規定した J. Gottmann の定義をかえりみよう。まず，かれの定義の立場について一言しておこう。

地理学者としての J. Gottmann の概念規定の立場は，いうまでもなく，地理学上の地域規定の立場である。それとともに，概念規定の仕方は，理論的規定というよりもむしろ現象的規定である。すなわち，なんらかの“個性，personality”をもつ地理学的地域，いいかえれば，なんらかの斉一性，unity，と独創的な性格，originality，をもつ地理学的地域であって，隣接する地域から截然と区別される地域の研究に意義を認めようとするものである[14]。

そして，メガロポリスは“巨大な都市，enormous urban，や大都市，metropolitan，の発達とかいうことを超えた特徴をもつ地理的地域”[15]であるとし，事実としては，アメリカ合衆国の北東海岸に沿う広大な地域，すなわち，ボストンの北方，New Hampshire の Hillsborough 郡からワシントンの南方，ヴァジニアの Fairfax 郡に至る延長約 965.6 km，約 3,800万の人口が住む地域を取り上げ，統計的には，1950年センサスによる“州経済地域，state economic areas”[16]によって区画するものとした[17]。

J. Gottmann 自身は，要素を与えて概念のカテゴリーを規定するという仕方をとっていないが，石水照雄氏は，これを非常によくまとめていられるとみられるから，同氏の要約を借用するとしよう。すなわち，“超大都市地域(メガロポリス)とは，歴史的に急速かつ連続的な都市化の進展により，実質的な都市的核心地のぐるりにいくつかの巨大都市地域ないし連担都市地域が形成され，それが遂には多核的都市化地域（ないしは連続的な都市的および近郊的地域）として連担的に合体し，他に匹敵するものがない程異常に大きな人口集中・商工業施設・財政的蓄積・文化活動をもつ地域となり，居住・臨海・工業・商業および金融・文化・政治等の諸機能に関して，国民経済の中枢としての役割を果しているような先駆的な都市化地域である”[18]。

さらに，これを要約すれば，メガロポリスは，(1) 急速，持続的な都市化が進行して，(2) メトロポリスを越えた多核的都市化地域を形成し，(3) 人口および経済的社会的文化的中枢機能の集中した地域であり，(4) 一国の経済・社会・文化に対して中枢的機能と地位とを占める地域であって，(5)

---

13) J. Gottmann, op. cit., 1961, pp. 4, 772.
14) J. Gottmann, op. cit., Art. reprint, pp. 46～47.
J. Gottmann, op. cit.,1961, p. 4.
15) J. Gottmann, op. cit., Art. reprint. p. 46 n.
J. Gottmann, op. cit., 1961, pp. 17～22.
16) 舘　稔，形式人口学—人口現象の分析方法，1960，p. 390 参照.
17) J. Gottmann, op. cit., Art. reprint, p. 46.
J. Gottmann, op. cit., 1961, pp. 6～7.
18) 石水照雄，上掲ペイパー，p. 2.
なお，J. Gottmann, op. cit., Art. reprint., pp. 48～50, および op. cit., 1961, pp. 4～9. 参照.

これまでになかった新しい都市化地域の形態であるというほどのことである。

3. 課　　題

J. Gottmann は最初の論文において，アメリカ合衆国の北東海岸線メガロポリスをおもな対象として，メガロポリスに関するおもな課題を次のごとく3つ取り上げ，これにヒントを与えている[19]。すなわち，

（1） どうして，メガロポリスが，このような形態をもって形成されてきたかということ。

この課題は，結局，合衆国の経済史に帰する。

また，この課題は，なにゆえにメガロポリスが世界の幾多の都市地域よりも，その歴史を通じて，いっそう速かにかつ持続的に成長してきたかということである。この課題に答えるためには，特定地域における都市の膨脹に関する動機と決定要因を検討することが必要となる。J. Gottmann は約40に上る要因を検討した結果，そのおもなものとして2つの要因を指摘している。すなわち，（A）一連の北東海岸の臨海都市がアメリカ経済の中枢としての機能を果たし，多核都市として発達したことと（B）各核心都市の相互の競争がついに各核心都市を合体させたこととである。

ここに，“アメリカ経済の中枢としての機能”については，その地理的位置によって，大陸開発と海外への門戸として太洋をコントロールするという枢機となってきたということである[20]。

また，J. Gottmann は，単行書においては，この2つの要因の基礎として，決定的なものは，17世紀から18世紀初期における開拓者精神であり，18世紀後半におけるメガロポリス核心諸都市の精神は，グリーン・バックのデザインに描かれた“Novus Ordo Seclorum”，すなわち，“時代の新しい秩序”の建設であった。そして，新しい秩序とは，人々の福祉，公正に配分された豊富のために知的に勤勉に働くということであった[21]。

（2） メガロポリスの現在のおもな機能が何であり，アメリカ合衆国の経済および北太西洋系内部におけるその役割が何であるかということ。

人口の面からいえば，それは集積機能にほかならないが，その根底には幾多の機能において，他の追随を許さないものがあるとして，（A）臨海性機能，（B）製造工業機能とその特化[22]，（C）流通および金融機能[23]，（D）文化指導的機能[24]，および（E）政治的機能をかかげている。

（3） メガロポリスの内部組織についての現在の問題が何であり，いかなる解決策が試みられてきたかということ。

おもな問題としては，人口の異質性[25]，交通障害[26]，スラム[27]，給水[28]，地方行政[29]の問題などを掲げている。

以上の3つの主要課題に関する J. Gottmann の取り扱いの方法ないしは態度について，わたくし

---

19) J. Gottmann, op. cit., Art. reprint., pp. 48～52.
20) J. Gottmann, op. cit., 1961, pp. 102 fg.
21) J. Gottmann, op. cit., 1961, pp. 69～76.
22) J. Gottmann, ibid., pp. 451 fg.
23) J. Gottmann, ibid., pp. 501 fg.
24) J. Gottmann, ibid., pp. 565 fg.
25) J. Gottmann, op. cit., 1961, pp. 694 fg.
26) J. Gottmann, ibid., pp. 658 fg.
27) J. Gottmann, ibid., pp. 404 fg.
28) J. Gottmann, ibid., pp. 729～735.
29) J. Gottmann, ibid., pp. 753 fg.

の気付いた二三の点をさしはさんでおくこととしよう。まず，J. Gottmannはメガロポリスという特定の地域における集団としての人間の態度や行動に鋭い観察を行なっている。例えば，メガロポリス形成の歴史的考察においても，上述のごとく，開拓者の精神や行動に重点をおいている。また，メガロポリスの機能と役割を分析するに当たっては，住民の稼得という面から光をあてている。なおまた，メガロポリスの問題を考察するに際しても，共に生活し，共に働いているメガロポリスの隣人を描くことによって，その困難を指摘し，その解決への協力を明らかにしようとしている[30]。

さらに，J. Gottmannは，“一般化した理論よりもむしろ事実の観察に基くべきもの”[31] とし，事実の観察は，単なる記述，description，ではなくて，動的な分析，dynamic analysisであり，したがって，これらの研究結果が，メガロポリスの将来および形成されつつあるメガロポリスに対して指針を提供しようというきわめて実践的な意図をもつものとみられる[32]。

ちなみに，形成過程にあるとみられるメガロポリスについて，アメリカ合衆国内においては，ピッツバーグ＝クリーヴランド＝シラキウス＝アルバニーのチェイン，イギリスにおいては，マンチェスターとリバープールからバーミンガムを通りロンドンに至り，北上してリーズとブラッドフォードに至るU字型メガロポリス，西北ヨーロッパにおいては，アムステルダムからパリへ，東へ延びてルールとコローニュまでの地域などを指摘している。近来，著者は，北アメリカ，西ヨーロッパおよび二三の地中海諸国を広く旅行し，いずこにおいても都市が膨脹していることを見出したといっているが[33]，日本を訪れたとは書いていない。そのせいか，著者の著述を通じて，日本について，ほとんど全く触れていないことが注意をひく。

J. Gottmann の単行書は，上述の論文の基本的態度と課題[34]とを全く受け継ぎ，これにラボリアスで精密な動的分析を加えている。本書は，第1部“都市化の動態”，第2部“土地利用革命”，第3部“強度稼得”，および第4部“メガロポリスの隣人”の4部から成っているが，第1部は上記の課題(1)メガロポリス形成の理由を歴史的に取り扱ったものである。第2部は，メガロポリスの形成発展に伴なう生活パターンの変化との関連において土地利用の近代革命を特論し，第3部においては，メガロポリスの生活パターンの経済的社会的意義を検討しつつ，上記の課題(2)のメガロポリスの機能を分析している。第4部においては，上記課題(3)メガロポリスの内部組織上の問題点を指摘するとともに，“時代の新しき秩序”と題して結論を与えている。

この著書を紹介することはこの稿の目的ではない。ただ，新しい研究分野を開拓したJ. Gottmannが，メガロポリスをどのように規定し，どういう方法と態度とをもって，どういう問題をおもな課題としたかを指摘すれば足りるのである。

4. この研究の方向

磯村英一教授によれば，地域開発計画において，日本で初めて“メガロポリス”という言葉を使ったのは，札幌—小樽—千歳—苫小牧—室蘭の諸都市に8カ町村を加えた北海道，道央地区の計画においてであった[35]。教授は，そのいきさつについて次のようなエピソードを付け加えている。すなわち，

30) J. Gottmann, ibid., pp. 691 fg.
31) J. Gottmann, op. cit., Art. reprint., p. 53.
32) J. Gottmann, ibid., pp. 54～56.
J. Gottmann. op. cit., 1961, pp. 770, 775～777.
33) J. Gottmann, op. cit., 1961, p. 776.
34) J. Gottmann, ibid., pp. ix, 10～12. 石水照雄，上掲ペイパー．p. 2.
35) 磯村英一，上掲書．p. 92.

"昭和32年私がアメリカのハーバード大学の訪問教授をやって帰ってきて，この地方でその話をした。千歳の市長が先に立って名をいち早く使って新しさをみせた。こんなところに北海道の都市の進歩的な意欲がみられる"。[36]と。

また，磯村教授は，不知火—有明—大牟田地区を九州メガロポリスの1つとされている[37]。

事実として形成過程にあるメガロポリスや構想としてのメガロポリスがようやく注意をひくようになってきたが，なかでも，文明史的見地から，地域開発や都市計画における"メガロポリス方式"を採り，"東海道メガロポリス"を中枢として日本列島の将来像を描いて多大の注目を集めているのが丹下健三教授の所論である[38]。教授の所論は，わたくしが理解したところが間違っていないとすれば，おおむね以下のごとく要約することができるであろう。

丹下教授の文明史的前提は，(1) 現代のダイナミズムと (2) 有機体の成長法則とにあるとみられる。(1) ダイナミズムについては，世界における人口増加と都市化の傾向を，そして，資本，ことに建設投資の傾向を，それぞれ，かえりみるとともに，一応，今世紀末を目途として，そのポテンシャルを考察し，"人口の爆発的増加，加速度を加えつつある人口の都市化の進行，そうして益々巨大化しつつある建設投資，これらは地球上の人間生活の環境を急速に変化させ，成長させつつある。その速度は，われわれの夢も及ばない速さである"[39]。次に，(2) およそ有機体の成長は機能分化と同時にその集合化であるが，この有機体の成長法則のアナロジーによって，"現在，分化と集合が平行して行なわれるような，行なわれることが可能であるような新しい社会組織ができつつある"[40]と考え，その条件を，現在進行している第2の産業革命に見出される。すなわち，第2の産業革命の特徴は，第1の産業革命が人間の肉体の延長を基幹としたことに対して，人間の神経系統の延長を機械化することを基幹とするコミュニケーション革命，あるいは，情報革命である点にある。第1の産業革命は一方通行的な"エネルギー的連結"を可能にし，第2の産業革命はフィード・バックを包蔵する"情報的連結"を可能とし，第1の産業革命による成長と変化は"代謝機能の旺盛さを示し"，第2の産業革命は，"その制御機能の充実であるともいえるだろう"[41]。そこで問題は，情報革命は，人と人との直接接触の必要を低減するか，それとも，増大するかということにある。教授は，情報革命は，人と人，人と物との直接接触の必要をさらに刺激するものと理解される[42]。そして，情報革命による新しい社会組織に対応するフィジカルな構造としてインフラ・ストラクチュアとエレメント・ストラクチュアを建造することの必要と可能を現代的ダイナミズムのなかに認められるようである[43]。

丹下教授は，こうした見地に立って，政策論的に，国土の構造の将来のヴィジョンを描くに当たり，求心化を中心とする点的なメトロポリス方式と分散化を中心とする点的なエクメノポリス方式と連帯化を中心とする線的なメガロポリス方式との3者選1を課題とされ，そして，教授はメトロポリス的構造は，国土を分断し，有機体の高度の成長を阻止する危険性をもつものとしてこれを退け，エクメノポリス的構造は，"相互の情報的連結の方式としてプリミティブ"[44]であるとしてこれを排し，

36) 磯村英一，上掲書，p. 92.
37) 磯村英一，上掲書，pp. 124～127.
38) 特に，
丹下健三，上掲論文，地域開発，1964年11月.
丹下健三，上掲論文，中央公論，1965年1月.
39) 丹下健三，上掲論文，地域開発，p. 4.
40) 丹下健三，同上，p. 5.
41) 丹下健三，上掲論文，中央公論，p. 55.
42) 丹下健三，同上，pp. 56～57.
43) 丹下健三，上掲論文，地域開発，pp. 6～7，4～5.

有機体進化の終極的な形として，脊髄的中枢軸が現われた線的発展形態としてメガロポリス的構造を採るのである。こうして，教授は，東海道メガロポリスへの人口と機能の集結を好ましとし，これを中心として日本列島の将来像を描かれるのである。

丹下教授の立場とこの立場から描かれた日本列島の将来像は，ヴィジョンとして，高く評価されなければならない。また，人口学的見地からみて，ここでは触れることができなかったけれども，情報的連結の導入による社会構造の変化を論ずるに当たり，Colin Clark の第1次産業，第2次産業および第3次産業の概念に対し，“産業という企業単位の分類では十分あきらかにならない”として，“人間行動をより直接的に示す職業分類”を基礎として，“第2次的人口”と“第3次的人口”を区別されたことは[45]，J. Gottmann の“第4次職業，quaternary occupation”の概念[46]とともに，考究さるべき重要な課題である。人口学の見地からは，ただ，丹下教授の構想において，情報革命が人間の直接的接触の必要を促すとみる点や機能の集結がすなわち人口の集結を結果すると前提されているようにみられるが，人口移動の動因や機能とその変化についてのもう少し詳細な考察が望ましい。また，メトロポリス方式がメガロポリス方式と背反することは明らかであるが，メガロポリス方式とエクメノポリス方式との背反については，なお考究の余地を残すものともみられる[47]。

丹下教授の構想を批判することがこの稿の目的ではない。ただ，確かにいえることは，いずれにしても，これと関連してなされなければならない多くの仕事が，われわれの手元に残されているということである。人口学の見地から，こうした仕事の1つ1つを片付けてゆこうとすることが以下1連のわれわれの研究なのである。

われわれは，日本のメガロポリスを人口学的見地から研究するに当たって，差し当たり，次のような主要課題を選んだ。もとより，これは研究発足時における課題であって，研究の進行とともに改変されるであろうことは避け難い。

（1） メガロポリスの境域の画定とその規準に関する研究

既成，あるいは，形成過程にあるメガロポリスの境域を，人口学の見地から画定することが必要であることはいうまでもない。そのためには，（A）先ず第1，メガロポリスを技術的に再定義すること，（B）どういう規準によってこれを画定するか，画定規準が重要な課題の1つであることこれまたいうまでもない。さらに（C）画定資料の収集と吟味が必要であるが，上述のごとく，J. Gottmann がアメリカ合衆国について，センサス局の地域構成の結果を利用したのとは，日本においては，事情は相当異なっている。日本の官庁人口統計は，その完全性と正確性においては確かに文明国中最も優れたものの1ではあるが，人口統計集計表章の統計単位地域も確立されていなければ，地域構成の貧弱さは，何といっても，おおい難い日本の官庁人口統計の最大の弱点である。（a）1955年3月，行政管理庁統計基準部は“日本標準都市地区分類”を発表した[48]。それは市区町村を単位地域とし，人口10万以上または10万未満の市で県庁所在地を中心市とし，その周辺にあっ

44） 丹下健三，同上，p. 9.

45） 丹下健三，上掲論文，中央公論，pp. 59～60.

46） J. Gottmann, op. cit., 1961, pp. 576, 580.
J. Gottmann の“第4次職業”とは，情報の処理，分析，調査，デシジョン・メイキングなどに当たり，多大の知的訓練を要し，多大の責任を有する個人の活動，すなわち，職業.

47） Cf.磯村英一，「エキュメノポリス」，日本経済新聞，1965年3月25日夕刊.

48） 行政管理庁統計基準部，地域分類専門部会編集，日本標準都市地区分類，分類表，地図及び説明，1954.
舘　稔，上掲，形式人口学，pp. 392～397.
舘　稔，人口分析の方法—形式人口学要論，1963，pp. 111～112.

て都市的性格が濃く，中心市と密接な社会的経済的関係を有する市町村で構成された。このほか，中心市が相互に接続するか，重なり合っている場合，これらを合わせて，京浜，富山＝高岡，中京，京阪神および関門の5つの“連合都市地区”を作った。その後，町村合併が著しく，単位地域の異質性が高まったので，現在では利用が困難である。なお，これまで，ただ1回限りの地域構成の試みであって，時間的比較は非常に困難である。（b）また，総理府統計局は，1960年国勢調査に当たり，真に都市的性格の地域を分析する材料を提供する目的をもって，“人口集中地区”を設定した。1960年国勢調査調査区のうち，原則として人口密度1 km²につき約4,000以上の調査区が市町村内でたがいに隣接して，1959年10月1日現在，人口5,000以上の地域を構成している場合，これらの調査区の集まりを人口集中地区とした[49]。この研究の目的からいって，この人口集中地区ははなはだ有用であるが，これまた，ただ1回で，1965年国勢調査結果による人口集中地区が設定されればさらに有用となるであろう。1965年2月，総理府統計局は“市区町村内の小地域別資料および標本調査における調査区の特性による層別抽出などに利用するため”[50] 1965年国勢調査について調査区別集計を行うことを決定した。これは，将来，実体地域構成のための好資料となるであろう。いずれにしても，われわれは，メガロポリスの境域を画定する以前に，いろいろの地域構成を自ら試る必要に迫られるのである。

（2） 核心都市の選定に関する研究

メガロポリスの性質上，核心都市を選定することが必要であるが，（A）核心都市を技術的に再定義し，（B）選定規準を明らかにして選定することが必要であるこというまでもない。

（3） メガロポリスの人口学的特徴に関する研究

(1)の課題と相表裏するものであるが，(1)によって画定されたメガロポリスの人口学的特徴を分析することが重要である。

（4） 核心都市の人口学的特徴に関する研究

(2)の課題と相表裏するものであるが，(2)によって選定された（A）メガロポリスの核心都市全体としての人口学的特徴と（B）各核心都市のそれとを分析することが必要である。

（5） メガロポリスの形成要因に関する研究

上述の J. Gottmann の第1の課題と同様であって，メガロポリスの研究に当たって必ず研究されなければならない課題の1つである。社会史的視点，経済史的視点などいろいろの視点からの研究が必要であるが，ここでは，人口史的視点に重点を置いて取り扱ってみたいと考えている。

（6） メガロポリスの機能と役割に関する研究

メガロポリスの研究上必ず研究されなければならない課題の1つであって，J. Gottmann の第2の課題に類似する。この課題の研究も，経済的，社会的，文化的などいろいろの角度から研究されなければならないことというまでもないが，ここでは，人口現象のいろいろの側面を分析することによって，経済的，社会的，文化的などの機能と役割に接近することを試みようと考えている。

（7） メガロポリスの人口学的構造とその変化に関する研究

以上の課題と若干重複するところもあるが，この課題の意図は，メガロポリスの動態を人口学的構造とその変化を通じて探ろうとするものであって，将来の動向についても，できれば，これを推

49） 大友篤，“統計表章単位地域としての人口密集地区について”，統計局研究彙報，第10号，1959年11月．
総理府統計局編，わが国の人口集中地区—昭和35年国勢調査による人口集中地区の人口，面積，および地図，総合編，1961．
舘　稔，上掲人口分析の方法，p. 112.

50） 総理府統計局国勢統計課，昭和40年国勢調査調査区別集計の計画，1965年2月1日．

測してみようとする。課題は，さらに，（A）メガロポリス全体の動きと，（B）各核心都市の動きと，（C）核心都市相互間の関連の変化などに細分されるであろう。

（8） メガロポリスの人口学的，経済学的，社会学的諸問題に関する研究

以上の研究を通じて捕えられた問題点を整理し，これらを指摘しようと試みる。

おわりに

以上において，近ごろ，都市発展の研究において，注目を集めてきたメガロポリスについて，一応，語義と定義を解説し，この研究に先べんをつけた J. Gottmann が提起した課題とこれに対する解答の方向についてその概要を紹介した。

ひるがえって，日本においては，メガロポリスの研究に当たって，人口学の見地からは，行なわれなければならない幾多の仕事が，いまだに着手されずに山積していることにかんがみ，われわれはその空き間を埋めようとしてこの研究に着手したのであるが，発足点においてわれわれが提起した課題を中心として，われわれの研究の方向の概略を記して，序説とした次第である。

An Introduction to Demography of Megalopolis in Japan

MINORU TACHI

Recently, "megalopolis" is increasingly attracting keen interest among the learned circle, due to phenomenal urban concentration of population in Japan. This is an introductory remark to demographic studies on megalopolis in Japan, by a study group in the Institute of Population Problems. Firstly, the author briefly introduces the studies on American Megalopolis made by Prof. Jean Gottmann who has pioneered such studies in this field. Secondly, he highly evaluates the vision of the Japan Proper which was drawn by Prof. Kenzo TANGE, basing on "the Tokaido Megalopolis"—a big ribbon from Tokyo Metropolitan region to Osaka-Kobe Metropolitan region along side the Pacific Ocean—, and points out what should be done in the demographic approach to megalopolis in Japan. Thirdly, he presents the following tentative major items of the project of this study; studies (1) on delimitation of megalopolis and its standard, (2) on selection of nuclear cities in megalopolis, (3) on demographic characteristics of megalopolis, (4) on demographic characteristics of nuclear cities in megalopolis, (5) on factors which affect growth of megalopolis, (6) on the function and role of megalopolis in the national development of Japan, (7) on demographic structure and change in megalopolis, and (8) on demographic, economic, and sociological problems concerning megalopolis in Japan.